

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 5

2017.12

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

No. _____

Date _____



地域の「創る」を

応援します。

稚内大谷高校2年生の皆さん

contents

01 第5回 キーパーソンに聞く

北海道大学総合博物館准教授 小林 快次 氏

04 特集

恐竜・化石を活かしたまちづくり 事例紹介:むかわ町、三笠市、中川町、足寄町

11 地域が動く・プロジェクト最前線

11 ① 上士幌町 地方と都市の交流をめざして ～ICTを活用した地域創生～

15 ② 北海道宗谷総合振興局 宗谷ひと図鑑事業

17 地域を創る人 地域でご活躍されているみなさんを全道14振興局毎に紹介するコーナー

17 後志編 田中 良 氏 真狩村を横のリスportsの聖地に

18 留萌編 佐古 大 氏 初山別で「楽しく」「続けて」「繋がる」

キーパーソンに聞く

恐竜・化石のポテンシャル溢れる北海道

北海道大学総合博物館准教授

小林 快次氏

平成29年4月27日、世界の古生物学会は北海道から発信されたニュースに震撼しました。北海道むかわ町穂別で、日本最大の恐竜の全身骨格化石が発掘されたというニュースは、数々のメディアに取り上げられ、多くの恐竜ファンの心を躍らせ、地元には大きな誇りをもたらしました。今回はその発表を行った北海道大学小林快次准教授に、北海道でのさらなる恐竜化石発掘の可能性や恐竜による地域活性化についてお話しをお伺いしました。

恐竜研究発祥の地・北海道

——先生は恐竜化石の発掘・研究の第一人者として世界で活躍されていますが、この分野に進まれたきっかけ、経緯についてお聞かせください。

もともと僕は、恐竜が好きというより、ものを見て、考え、自分なりの答えを出すというサイエンスのプロセスが好きなんです。中学生の頃は、アンモナイトに熱中していました。当時から三笠市のアンモナイトは世界的に有名で、北海道にアンモナイトを探りに行くのが夢でした。

出身は福井県なのですが、高校1年生の時に「福井から恐竜が出るかも」という話が出てきて、運良く調査に立ち会うことができました。そういう流れの中で次第に恐竜にも興味を持ち、横浜の大学からアメリカの大学に留学し、挫折も経験しながら一心不乱に研究を続けていたら、いつの間にか「恐竜」が専門になっていったという感じです。ひと言でいうと凝り性なんです。

——アメリカから戻られて、研究の場を北海道に移されました。北海道というフィールドにどのような可能性を感じていらっしゃったのでしょうか？

恐竜が大繁栄した白亜紀後期の恐竜化石は、本州よりむしろ九州と北海道からよく出ています。何より日本人で初めて恐竜化石の発掘を行い、それをニッポノサウルスと名づけたのは北海道大学の長尾巧先生です。あまり知られていませんが、北海道は日本の恐竜研究の発祥地なんです。北大に赴任する以前から、北海道には恐竜研究の伝統とポテンシャルが詰まっていると思っていました。

*むかわ竜



出展：Newton2017年7月号 ©安友康博/Newton Press

2013年から2014年にむかわ町穂別地区で大規模な発掘が行われた約7200万年前（白亜紀後期）のハドロサウルス科恐竜化石の通称。脊椎の一部は2003年に発掘されていた。今後、新種であることが判明した場合、正式な学名がつけられる。





小林 快次 (こばやし よしつぐ) 氏

北海道大学総合博物館准教授・恐竜学者。

1971年福井県生まれ。中学生のころアンモナイトの発掘を行ってから化石発掘に没頭。高校1年生のとき、恐竜の発掘ボランティアに参加したことで、恐竜研究の道へ。横浜国立大学で1年学んだ後、渡米。1995年アメリカ・ワイオミング大学地質学地球物理学科を卒業後、2004年アメリカ・サザンメソジスト大学地球科学科にて博士号を取得。

福井県立恐竜博物館古生物学研究職員を経て、2005年から北海道大学に所属、2009年、同大学総合博物館准教授に就任。「むかわ竜」の発掘には2013年から携わる。

▲インタビューに答える小林准教授。後ろの本棚には、恐竜はもちろん、鳥や爬虫類など様々な蔵書が並ぶ。

「むかわ竜」発掘の意義

——北海道で、日本最大の恐竜の全身骨格化石「むかわ竜」が発掘されました。現在も、最前線で研究活動に携わっている先生から見て「むかわ竜」にはどのくらい価値があるのでしょうか？

これまで強く言ってきたんですけど、が、「むかわ竜」は現在の日本において最高の恐竜化石です。他の地域で見つかっているものと比べても格段に全身の骨が揃っている標本です。世界では全身骨格はたくさん見つかっていますが、日本での学術的な価値はすば

けて高いです。僕の使命はこの価値をできるだけ分かりやすく、多くの人に伝えることだと思っています。

実は、むかわ町の方々にもその重要性をすぐには理解していただけませんでした。ただ、今年6月にむかわ町で行われた全身骨格の公開では、実物を見るために多くの人が訪れ、取材や報道がありました。化石を目の前にしてみると骨の質感から本物の迫力が感じられます。ニュースの画面でしか見えない人の反応と実物を見た人の反応は全然違います。その反応をみて、町の皆さんも改めてその価値を実感してくれるようになったと思います。

——今後、北海道内で「むかわ竜」のような恐竜化石が発掘される可能性はありますか？

これまでに道内では、むかわ町のほか、夕張市、小平町、中川町で恐竜の化石が発掘されています。道内で発見された恐竜化石の特徴は、いずれも海の堆積物という点です。恐竜一体がそのまま海に沈んだ可能性が高いので、骨の出処が特定できれば、周辺で全身骨格が出てくる可能性が大いにあります。恐竜時代の海の地層は襟裳岬から稚内までと非常に広い範囲にありますので、局所的なスポットは限定できませんが、今後「むかわ竜」のような素晴らしい全身骨格の化石が再び出てきても僕は全く驚かないです。

——恐竜をテーマに地域おこしに取り組み事例も増えていますが、北海道でもそうした取組は可能でしょうか？

恐竜で地域が盛り上がった例として思い浮かぶのはカナダのアルバータ州ドラムヘラーにある王立ティレル古生物学博物館です。もともと町の人口は1万人に満たなかったのですが、今は年間50〜60万人くらいが、この博物館のために町に訪れ、ホテルに滞在し食事を取ったりします。経済効果は抜群で、町は恐竜のモニユメントで溢れかえっています。

日本国内における恐竜での町おこしと例えば、福井県立恐竜博物館を思い浮かべる方も多いと思います。「年間100万人の来場者」というのは確かにインパクトがあります。しかし、新設当初は年間20万人ほどの来場者数でした。福井県は、それを巨額の予算と10年以上の年月をかけて、現在の規模にまで育てました。

一方で、その経済効果の大部分は福井県と福井市に限定されてしまい、博物館が建つ勝山市には十分に及んでいないという課題もあります。

予算が無限にあれば北海道でも福井と同様のことをすることは可能だと思いますが、福井県立博物館に相当する大きな箱物（建物・展示）を作るのであれば札幌が候補として挙がるでしょ

う。今のままでは結局、札幌の一極集中に拍車をかけるだけになりかねません。しかも、経済効果が現れるまで長い年月がかかるでしょう。どこにお金を使って、どこに使わないのかを見極めていかないと、中途半端な無駄使いに終わってしまいます。

ネットワークで

価値の最大化を

— 恐竜を活用して北海道全体を盛り上げるためにはどのような取組が必要でしょうか？

北海道で恐竜をキーコンテンツの一つとしていくのであれば、短期と長期での戦略を立てる必要があると思います。

まず短期的な取組として既存の博物館や人材を活用してネットワークを広げ、各自が行っている取組を情報共有していくことが大事だと思います。そのためにも道庁が中心となって、むかわ町や三笠市、中川町など各自自治体を取りまとめ、一致団結させて欲しいですね。それぞれの自治体にとっては、お金や人が集まる仕組みをつくらない限りは、「恐竜のまちづくり」は難しい話です。仕組みといっても、新しい博物館をつくるということではなくて、まずはソフト面、人や組織の面をうまく整備していくことによって、新たな価値を生み出すことは可能です。実績

が出るまで時間はかかるかもしれませんが、道や各自自治体が一丸となって取り組むことで、地域の魅力を伝え、多くの人を引きつけ、訪れてもらう仕組みをつくることできると思います。

また、地元の人に「恐竜・化石」に理解と親しみを持ってもらうことも大切です。先述のとおり、北海道では襟裳岬から稚内までの広い範囲に恐竜化石が存在する可能性があります。ここまで広いと発掘にも人海戦術が必要です。例えば、各地の博物館を中心に、地元のアマチュア発掘家、親子連れ、学生や一般の方を集め、山に入って「みんなで探そう」といったプログラムを全道規模で行ってみてはどうでしょうか。

実際、和歌山県ではそういった取組を行っていて、一般の参加者が恐竜の歯を発見したりしています。こうした活動を通して恐竜・化石に親しむ土壌を地元からつくっていくことで、将来大きな博物館ができたときの相乗効果も産み出せると思います。

長期的には、必要に応じて新しい「恐竜博物館」の建設を検討し、継続的に北海道の魅力を道内外の人たちに伝える必要があるでしょう。それまでに各地の博物館ネットワークをしっかりと構築しておいて、新しい恐竜博物館は単独の活動をするだけでなく、各地域の博物館の連携のハブとして活躍し、

北海道全体の恐竜の機運づくりに一役買って欲しいですね。

三日坊主ついでいいことだよ

— 教育分野に恐竜資源を活用することについて、その意義や効果についてお聞かせください。

恐竜は、面白さを伝えるパワーに満ちあふれた素材だと言えます。

僕は講演やイベントで各地を回っていますが、今まで恐竜のことが嫌いで堪らないという人には会ったことがありません。特に子どもは素直に興味を持って聞いてくれます。この「興味を持つ」ということが、「ものを知る楽しさ」につながることで、大人も含めた生涯学習の題材、サイエンスの入り口として「恐竜」が持つ使命は大きいと思っています。

よく大人が子どもに「夢を持ちなさい」と言っているのを耳にしますが、実はとても難しいことです。そもそも夢を抱くという感覚が分からないので、混乱するだけでしょう。僕は子どもたちと話をするときには、「三日坊主ついでいいことだよ」、「やってみて失敗してもたいしたことではないからやってみなよ」と言っています。色々な経験をすることで、自分に合うものを見つけ、興味を持って考えるようになる。夢も興味も自然に出てくるものだから、そういう環境をつくってあげることが



▲研究室の机上には、研究されるのを待つ化石が並ぶ。ここから新種の恐竜が発表される日が近いかも知れない。

大切です。「すぐに飽きるからダメ」と制限するのではなく、「三日坊主を恐れるな」が僕のモットーの一つです。僕自身も飽きっぽいのですが、恐竜はたまたま三日坊主の延長で二十年、三十年と続いているだけなのです。夢を持つことがゴールではなくて、続けているうちにそれが自然と夢になるのであって、恐竜もそういった題材の一つになってくれたらいいですね。

— 最後に、恐竜化石を活用した道や地域の取組に対する期待をお聞かせください。

恐竜研究の発祥の地であり、フロンティアでもある北海道は、無限の可能性を秘めていると思っています。僕は研究者であり、学術的な目で恐竜を見ていますが、それを地域振興に活かしていくことはとても重要なことだと考えています。むかわ町が一つのモデルケースとなり、北海道全体が恐竜化石をテーマに盛り上がっていくことを期待しています。